

# フランスにおける包括書法に関する一考察

## Une réflexion sur l'écriture inclusive en France

中尾和美  
Kazumi NAKAO  
慶應義塾大学  
Université Keio  
E-mail: knakao@sfc.keio.ac.jp

ふらんぼー(Flambeau) vol.49 2023, p. 41-60.  
原稿受理 2023-11-22 ; 最終版 2024-01-28

### 抄録

フランス語の包括書法には、語彙的女性化、二重語を使用する統語的女性化、中性表現を使用する中立化がある。フランスでは語彙的女性化は公にほぼ認定され、職業名の女性形は一般に使用されている。それに対して中黒を使用した省略二重語による女性化、及びノンバイナリーな代名詞による中立化は、文章読解や文法に重大な影響を与えるとの懸念から公が拒絶している。加えて男性形の総称用法という言語直感が話者には根強くみられる。

### Summary (Résumé)

Parmi les trois procédures de l'écriture inclusive, la féminisation lexicale est officiellement approuvée et largement répandue en France. En revanche, celle par l'emploi du point médian avec les doublets abrégés et la neutralisation par l'emploi des pronoms non binaires, qui risquent d'avoir des impacts significatifs sur la lecture et la grammaire, sont vivement contestées par les autorités. L'intuition du masculin générique est aussi fortement ancrée chez les locuteurs natifs.

キーワード（包括書法、職業名の女性形、二重語、男性形の総称用法、iel）

© ふらんぼー Flambeau 49 (2023) pp. 41-60.

183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1 東京外国語大学フランス語研究室  
183-8534 French Section, Tokyo University of Foreign Studies, 3-11-1  
Asahi-cho Fuchu City, Tokyo

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>



## 1. はじめに

社会の変化は言語に対する人々の意識を変える。欧州議会では、2019年1月15日「欧州議会における男女平等の統合的取り組み(*Approche intégrée de l'égalité des femmes et des hommes au parlement européen*)」が可決された。その第15条において性の観点から中立的言語使用に対する新たな指針が採択され、「欧州の公用語全てにおいて、性の観点から平等かつ包括的な言語が使用されるための実践的な助言を与える[...]」<sup>1</sup>と規定された。フランス語圏においても、女性の存在を言語的に可視化することが声高に言われるようになって久しい。男女平等を言語的に示す手段としては、包括書法 (*écriture inclusive*)が講じられてきている。フランスは、カナダのケベック州、スイス、ベルギーなど他のフランス語圏の国々と比べると遅れて包括書法が導入された<sup>2</sup>。

本稿では、包括書法を、1) 新たな女性形を職業名などに使用する語彙的女性化、2) 男性形の総称用法を避けるために男女両方の形式を同時に使用する統語的女性化、3) 性が中立的な表現を使用する中立化の3つの手法に分類した上で、フランスの状況を概観する<sup>3</sup>。現在フランスでは、様々な書法が「包括書法」の名のもとに賛否が論じられる傾向にある。しかし、実際の受容と実践はそれぞれの書法によって大きく異なっている。語彙的女性化は最も受容度が高く、これ以外の手法には慎重な態度をとる立場をとる人々がいる<sup>4</sup>。また、統語的女性化を強く推進しながらも、新たなノンバイナリーな人称代名詞 *iel* に距離をとる立場もある<sup>5</sup>。おしなべて全ての手法を推奨する急進的な推進派もいる<sup>6</sup>。政府は「いわゆる包括書法(*écriture dite inclusive*)」に関して、2017年から2023年にかけて何度か制限を打ち出したが、これも中黒などの記号を使った省略語法や *iel* に対する反論が中心であり、包括書法すべてに難色を示しているわけではない<sup>7</sup>。以下、3つの手法に分けて、形態、これまでの経緯、賛否両論、実際の運用などをそれぞれ概観しよう。

---

<sup>1</sup>[https://www.europarl.europa.eu/doceo/document/TA-8-2019-0010\\_FR.html](https://www.europarl.europa.eu/doceo/document/TA-8-2019-0010_FR.html) (2023年9月25日閲覧)

<sup>2</sup> ケベック州では1979年、スイスでは1981年男女同権が憲法で制定されたのちの1986年、ベルギーではフランス語共同体議会で職業名の女性化を目指す政令が可決された1993年に、言語上の女性の可視化が公に議論され、それぞれ具体的な動きがあった。それに対してフランスでは、1999年になってようやく公に女性の職業名などに関する要綱が制定された。(Cf. 中尾 (2022)).

<sup>3</sup> 語彙的女性化(*féminisation lexicale*)、統語的女性化(*féminisation syntaxique*)の名称は、Kilinkenberg (2021)に準じた。

<sup>4</sup> Cerquiglini (2018), Charaudeau (2018, 2021).

<sup>5</sup> Haddad (2019, 2023).

<sup>6</sup> Viennot (2018)。Viennot自身のサイトで、より詳細が論じられている。

<https://www.elianeviennot.fr/Langue-mots.html> (2023年9月25日閲覧)

<sup>7</sup> 本稿の3.3.2 および4.1 参照のこと。

## 2. 語彙的女性化

語彙的女性化は、現在3つの書法の中ではフランスで最も受容されている。しかし、これまでに数多くの議論があり、公に認められるようになるまでには多くの時間を要した<sup>8</sup>。最初の動きは、1984年女性形作成に関わる用語委員会の設置が官報で正式に公表されたことに始まる。委員会は、職業名などの女性化に関する指針をまとめて1986年3月11日付官報に明記したが、教育大臣と首相から反古にされ日の目を見なかった。1998年、社会党政権のジョスパン内閣において、再び委員会が新たに招集され、Cerquiglini 監修のもとに1999年、要綱 *Femme, j'écris ton nom... Guide d'aide à la féminisation des noms de métiers, titres, fonctions* が作成された。これによって、初めて公に新たな女性形の形態及び使用に関して指針が提出された。2015年には、首相の独立諮問機関である女男平等高等評議会 (Haut conseil à l'égalité entre les femmes et les hommes (HCE)) が *Pour une communication publique sans stéréotype de sexe. Guide pratique* (以下 HCE と表記) を公開し、職業などの名詞は指示対象の生物性と一致した名詞を使用するよう推奨した。この便覧は2022年に改定<sup>9</sup>され、より詳細に指示が記された。政治レベルでは、Edouard Philippe (当時首相) が、2017年11月21日付の通達において、職務を担う名詞は、1999年の要綱に則り、指示対象の性に一致させることを明記した<sup>10</sup>。また、2019年、それまで頑なに女性形を認めてこなかったアカデミフランセーズがようやく職業名の女性形を承認するに至ったが、依然として官位の女性形は認めない立場を取り続けている<sup>11</sup>。教育においては、フランスで出版されている外国人向けの FLE の教科書では概ね職業名の女性形が女性に対して使用されるようになってきている (中尾 2022 : 12)。このような事実からも、2020年代の現在、職業名の女性形はフランスではほぼ認知されてきているが、依然として反論や拒否反応もある。

### 2.1. 新たな女性形に対する反論

新しい女性形に対する反論の一つとしては、形態上の揺れがある。たとえば男

---

<sup>8</sup> この辺りの経緯は Cerquiglini (2018) に詳しくまとめられている。中尾(2022)でも簡潔に言及した。

<sup>9</sup> この改訂版には、Viennot と Haddad も加わっている。 [https://www.haut-conseil-egalite.gouv.fr/IMG/pdf/guide\\_egacom\\_sans\\_stereotypes-2022-versionpublique-min.pdf](https://www.haut-conseil-egalite.gouv.fr/IMG/pdf/guide_egacom_sans_stereotypes-2022-versionpublique-min.pdf) (2023年9月25日閲覧)

<sup>10</sup> <https://www.legifrance.gouv.fr/download/pdf?id=wEtdPmGTGjdd7202jfyTkHEkAp4FIzANS-DxD8-Hjk=> (2023年9月25日閲覧)

<sup>11</sup> Cf. La féminisation des noms de métiers et de fonctions.

[https://www.academie-francaise.fr/sites/academie-francaise.fr/files/rapport\\_feminisation\\_noms\\_de\\_metier\\_et\\_de\\_fonction.pdf](https://www.academie-francaise.fr/sites/academie-francaise.fr/files/rapport_feminisation_noms_de_metier_et_de_fonction.pdf) (2023年9月25日閲覧)

性形が-*eur* で終わる名詞の場合、-*esse*, -*eure*, -*euse*, -*trice* の選択肢があり、選択には一定の法則があるが、いまだ定まっていないものもある<sup>12</sup>。実際、*auteur* の女性形としては *autrice* と *auteure* が、*professeur* の女性形としては *professeure* と *professeuse* など、いくつかの形態が混在しているのが現状である<sup>13</sup>。

また、新たに作られた女性の職業名が別の意味をもたらさうという事実も、反論の根拠にされた。具体的には、主として以下の3点である。

a) 女性形がすでに事物を指す名詞として存在する<sup>14</sup>

b) 女性形が職業に従事する男性の配偶者を指す<sup>15</sup>

c) 女性形が指示対象の価値を貶める<sup>16</sup>

これらの反論は男性の側からのみでなく、女性の側からも出た。とりわけ c) に関しては、2.2.で見ると、自らの威信を損なわないためにあえて男性形で呼ばれることを女性自身が求める場合も少なくない<sup>17</sup>。

Cerquiglini (2018)は、a)に対しては *religieuse* のように事物と人間の職業を共に指す多義語がすでに存在していること、b)に対しては、中世では日常生活にまつわる職業に関して女性形がその配偶者という意味ではなく職業名として機能していたこと、c)に対しては、13-16世紀においては女性の職業名が否定的な意味合いなく使用されていたことを指摘し、3つの反論は新たな女性形を使用するにあたって障害にはならないとしている。また、19世紀には男子学生の遊び相手をする若い女性を指していた *étudiante* が今では問題なく女子学生を指す語になったように、語の意味は社会の変化とともに容易に変わりうることに言及し、新たな職業名の女性形が歴史的にも言語学的にも正当であることを論じている。

## 2.2. 実際の運用と拒否反応

2020年代の現在、*la ministre* や *la préfète* など、すでに一般に広く使用される新しい女性形も少なくない。

(1) Le 7 décembre, en conseil des ministres, un décret démettant de ses fonctions la préfète d'Indre-et-Loire, Marie Lajus, a été signé. (*Le Monde*<sup>18</sup>)

<sup>12</sup> Cf. Cerquiglini (2018:110).

<sup>13</sup> 教科書や辞書類などでは *professeure* の形が記されているが、2022年版の HEC やパリ＝サクレ大学の要項では、*professeuse* の形が推奨されている。

<sup>14</sup> たとえば *moissonneuse* (刈り入れ機) や *cafetière* (コーヒ沸かし) のような例を挙げることができる。Cf. Cerquiglini (1989:30-31).

<sup>15</sup> かつて *ambassadrice* は大使夫人を指していた。

<sup>16</sup> *directrice* は、小学校の先生のような印象を与えるので組織の長を呼ぶには相応しくないとされていた。Cf. Cerquiglini (1989:30-31).

<sup>17</sup> HEC (2022 :62).

<sup>18</sup> [https://www.lemonde.fr/idees/article/2022/12/26/nous-affirmons-notre-soutien-a-la-prefete-marie-lajus-et-a-travers-elle-a-celles-et-ceux-qui-uvrent-au-respect-de-la-loi\\_6155706\\_3232.html](https://www.lemonde.fr/idees/article/2022/12/26/nous-affirmons-notre-soutien-a-la-prefete-marie-lajus-et-a-travers-elle-a-celles-et-ceux-qui-uvrent-au-respect-de-la-loi_6155706_3232.html) (2023年9月25日閲覧)

その一方で、女性に対して常に新たな女性形が使用されるわけではないという現実もある。実際 2019 年リヨン第一大学は博士論文審査の議事録に女性形 *doctoresse* を使用することを、学生の要望に反して拒否した<sup>19</sup>。また、フランスの大学サイトに書かれた女性教員の肩書きやプロフィールを見ると、男性形の *professeur* が使われているケースが散見される。とりわけ *maîtresse de conférences* に関しては、*maître de conférences* と比べると格段に使用頻度が低い。*maîtresse* はすでに「小学校教師」もしくは「愛人」という意味で使われている名詞であるために、権威を保つためにはふさわしくないと女性自身が感じており、自らあえて男性形 *maître de conférences* を選ぶケースが少なくないようである<sup>20</sup>。また、*écrivaine* と名乗ることを拒否する女性作家もいる。たとえば Christine Angot は、2021 年の時点で「自分は *écrivain* であって *écrivaine* ではない」と断言し、女性形 *écrivaine* を拒否している。その理由は「『*écrivaine* と言った』と人々から言われるからだ」と話している<sup>21</sup>。女性の側からのこのような反応は、上であげた c) を女性自身がいまだに懸念しており、名詞によっては新しい女性形が世間でまだ十分受容されていないという事実が背景にあると考えられる。換言すれば、女性の可視化だけでは、新しい女性形を使用するための動機づけとするには不十分であるということ、また新しい女性形の中にはいまだにネガティブな価値判断を容易に伴いうる有標な形態があるという現実が窺える。

### 3. 統語的女性化

統語的女性化を標榜する人々は、女性を言語的に明示することが肝要であり、言語的可視化が現実世界の男女平等にもつながりうると考える傾向にある。しかし、統語的女性化に関しては、語彙的女性化よりもさらに複雑な議論が現実にはある。それは、語彙的女性化が単なる語彙の問題であるのに対して、統語的女性化は、これまで行なわれてきた文章表記法に重大な影響を与えかねない書法だからだろう (Charaudeau 2018 : 3)。フランス語では男女混成の対象を指す際に、伝統的には名詞の男性形が使用されてきた。これは、*masculin générique* と呼ばれる男性形の総称用法である。しかし、男性形の総称用法が女性の存在を見えなくするという意見がある。その代わりに提案されているのが、統語的女性化である。これは大きく分けると二つの手法があり、一つには男性形と女性形を完全な形で

---

<sup>19</sup>Haddad (2023:283).

<sup>20</sup> このサイトでは、6 人の女性同僚に自分の肩書きについて質問したところ、全員が躊躇なく *maître de conférences* を選んだと書かれている。その理由は、*maîtresse* は、小学校の教師のようである、美しくない、権威が感じられないなどであったということである。  
<https://lesoursesaplumes.info/2016/03/02/la-feminisation-des-titres-dans-les-universites-experience-personnelle/> (2023 年 9 月 25 日閲覧)

<sup>21</sup> [https://www.lepoint.fr/societe/auteure-autrice-ecrivaine-femme-de-lettres-une-feminisation-qui-tarde-18-06-2021-2431643\\_23.php#11](https://www.lepoint.fr/societe/auteure-autrice-ecrivaine-femme-de-lettres-une-feminisation-qui-tarde-18-06-2021-2431643_23.php#11) (2023 年 9 月 25 日閲覧)

併記する完全二重語、もう一つにはピリオドなどの記号を使って分ち書きをする省略二重語と呼ばれる手法である。両者とも具体的な表記法はまだ正確に定まっていない。

### 3.1. 完全二重語

完全二重語(doublet complet)とケベックで呼ばれるこの書法は、フランスでは二重屈折 (double flexion)(Viennot 2018 :10)、屈折表現(formulation fléchie) (Haddad 2023 :135)などとも呼ばれる。男性形と女性形を共に完全な形で併記する書法で、男女の公平性を保つためにできる限りアルファベット順で表記することが推奨されている<sup>22</sup>。2017年11月21日付の通達では、人事採用や休暇に関する告示を官報(Journal officiel)で行う場合には、性による不平等を避けるために完全二重語を常に使用することを要請している。また、2022年の改定版 HEC では、統語的女性化を行う場合にはなるべく完全二重語を使用することが推奨されている。

#### (2) Le candidat ou la candidate<sup>23</sup>

完全二重語は、男性形及び女性形を併記するので必然的に重い表記となる。とりわけ形容詞が付加されるとさらに読みにくくなり、読む作業に支障をきたしかねないことがしばしば指摘される。

#### (3) Ces rédacteurs et rédactrices paraissent expertes et experts du langage exclusif. (Haddad 2023 :193)

Haddad は、このような場合、近接性の原則に従って近い方の名詞の性に形容詞を一致させ、形容詞は繰り返さないことを提案している。

#### (3') Ces rédacteurs et rédactrices paraissent expertes du langage exclusif.

また、どちらかの性別が現実に数の上で優勢である場合には、形容詞を優勢な性に一致させることが好ましいとしている。たとえば、仮に男性の編集者の方が多ければ、(3)を(3'')の形で提示することが Haddad では推奨されている。

#### (3'') Ces rédactrices et rédacteurs paraissent experts du langage exclusif.

---

<sup>22</sup> Cf. Viennot (2018 :27), Haddad (2023:136).

<sup>23</sup> <https://www.legifrance.gouv.fr/download/pdf?id=wEtdPmGTGjdd7202jfyTkHEkAp4FIizANS-DxD8-Hjk=> (2023年9月25日閲覧)

## 3.2. 省略二重語

統語的女性化のもう一つの表記法は、省略二重語(*doublet abrégé*)と呼ばれ、男性形と女性形の語尾のみを併記して分かち書きをする形式である。

(4) *Les étudiant.e.s*

(5) *Les étudiant/e/s*

省略二重語では、分かち書きの記号が公式に定まっていないため、記号選択がしばしば議論的になる(Haddad 2023 :163)。候補としては、ピリオド(*les étudiant.e.s*)、*point médian* と呼ばれる中黒(*Les étudiant·e·s*)、カッコ(*les étudiant(e)s*)、スラッシュ(*les étudiant/e/s*)、大文字の E を使って語尾を区切ること(*les étudiantEs*)が提案されている。HEC (2015)では、読みを邪魔しないピリオドまたは中黒の使用が推奨されているが、2022年の改訂版 HEC では、一番コノテーションに乏しい中黒が推奨されている。同様に Haddad(2023)も、中黒を打つための現行キーボードの具体的なキー操作に数ページを割いてまでも中黒を使用するよう推奨している。中黒以外の記号に関しては、カッコは女性の立場を貶める可能性があること、スラッシュは男女の対立を示唆し、大文字の E の使用は女性により重きが置かれる認識を与えかねないので避けるべきであるとされている(Haddad 2023:155-156)。省略二重語そのものを採用すべきかどうかの基準に関しては、いくつかの提案がされてはいるが、いずれの場合も一般に広まっている基準ではない<sup>24</sup>。

## 3.3. 賛否両論

### 3.3.1. 賛成意見

統語的女性化の賛成派の中には、男性形の総称用法自体正当化できないと主張する人々がいる。それによれば、男性優位の原則は 17 世紀の Vaugelas に端を発する規則で歴史的に新しい規則であること、また古典ギリシア語やラテン語および中期フランス語では、最も近くに位置する名詞に性数一致させる近接性の法則がとられていたことなどを根拠に挙げ(Viennot (2018 :25), Haddad (2023 :188-189))、

---

<sup>24</sup> Haddad (2023 :163)では、変化語尾によって推奨の度合いが異なる。たとえば、男性形の語尾に e を付加することで女性形が形成される場合および *citoyen.ne* のように「子音 1 文字 + e」の付加によって形成される場合には、省略二重語表記が望ましいが、女性形の語尾が男性形と大きく異なる場合や複数形の場合には、接尾辞が長すぎるため省略二重語表記を避ける方が好ましいとしている。省略二重語を避けるべき例としては、*joueur.euses*、*directeurs.rices* などが挙げられている。また、アクサン・グループを付加して作られる女性形の場合には、*bijoutier.e* のようにアクサン・グループを削除するが、*infirmier.ère* のような例は保持すべきであると提案しているが、逆にかなり煩雑になっている。

男性形の総称用法の正当性自体に疑問を投げかけている。

男性形の総称用法の使用が認知的に女性を排除するという議論もある。言語心理学の観点から男性形の総称用法を分析した Gyax et al.(2019:5)<sup>25</sup>は、男性形の総称用法が使われた場合、他に強い文脈がなければ男性を指す読みが常に活性化されるとしている。同様に Tibbin et al. (2022)は、*joggeurs, joggeuses et joggeurs, joggeurs et joggeuses, joggeur.euses, un groupe de jogging* などの表現 22 種類を、1018 人のフランス語母語話者に見せてテストをしたところ、男性形の総称用法では男性の表象を喚起しやすく、逆に統語的女性化を使った場合には、完全二重語、省略二重語にかかわらず、女性が感知されやすい結果が出たことから、男性形の総称用法の使用は男性を喚起しやすいバイアスを読者に与えると結論づけている。

しばしば指摘される省略二重語の読みにくさについては、M.Dupont と表記しても *Monsieur Dupont* と読める現状があり、特に読みに支障はきたさないという反論がある(Viennot :2018)。

### 3.3.2. 反対意見

反対派は大きく 2 つのグループに分けられる。一つには、省略語法のみに対抗する立場と、もう一方は、賛成派が挙げている根拠が成り立たないことを主張する立場である。

前者については、政府からすでに公式に動きがいくつかあった。2017 年 11 月 21 日付の通達では、記号を用いた「いわゆる包括書法(*l'écriture dite inclusive*)」を官報(*Journal officiel*)では使用しないことを指示した。次いで、2021 年 5 月 5 日付の通達では、Jean-Michel Banquier (当時教育大臣) が「包括書法(*écriture inclusive*)に反対する」と明言したが、具体的には「学校教育において、男性形の総称用法の代わりに中黒を用いた省略二重語を使用することを放逐する」と記すにとどまっている<sup>26</sup>。その理由として、省略二重語は発音が不可能であるため、若者の「読みと理解を妨げる」とし、とりわけ読解にすでに問題を抱える学習障害児にとって省略二重語は障害になることを指摘している。他方、同通達では、業務分野における語彙的女性化および完全二重語の使用は推進すべきであるとしているので、槍玉に上がったのは教育における省略二重語の使用のみであることが窺える。また 2023 年 10 月 30 日には、「いわゆる包括書法(*l'écriture dite inclusive*)」の使用を制限する法案が、上院で賛成 221、反対 82 の大多数で可決された<sup>27</sup>。ここでも包括書法として制限の対象となったのは、*les citoyen.nes* や *les citoyen.ne.s* のように中黒やピリオドを使った省略二重語、および *iel* などの新たなノンバイナリーな代名詞であり、それらを公的文書で使用した場合には文書自体を無効とすること、商業文書、販売広告、取扱説明書などでの使用を禁止することを定めた。この法

<sup>25</sup> 本論文の日本語訳は、立花(2022)で読むことができる。

<sup>26</sup> <https://www.education.gouv.fr/bo/21/Hebdo18/MENB2114203C.htm> (2023 年 9 月 25 日閲覧)

<sup>27</sup> <https://www.senat.fr/dossier-legislatif/pp121-404.html> (2023 年 11 月 3 日閲覧)

案は、省略二重語の使用をさらに狭め、かつ法的に制限することからも、2017年および2021年の通達と比較しても、政府が一步踏み込んだ規制を行ったことが見て取れる<sup>28</sup>。

後者としては、近接性法則の史実に対して反意を唱える立場がある。Moreau (2019)によれば、近接性の法則はラテン語においてシステマティックに行われていたのではなく、属詞の場合、人以外では一番近い名詞または中性複数名詞に一致させていたが、人に対しては男性複数名詞に一致させていたこと、また、中期フランス語においては、付加形容詞、属詞共に大半が男性名詞に一致してことを挙げ、賛成派が統語的女性化を正当化するために史実を曲げていることを批判している。

また、二重語の使用は「美しくない」とする価値判断もある(Charaudeau 2018:3)。Haddad (2019)は、包括書法を強く推進しているが、文脈によっては繰り返しを避けるために完全二重語併記ではなく、性によって変化しない中立的な表現を使用する方が好ましいとしている。これは本稿の4で取り上げる中立化であり、たとえば、*directeurs et directrices* のかわりに *direction* の使用を推奨するということである。

### 3.3.3. 折衷案

統語的女性化を必要性和状況によって使い分けることを提案する折衷案も見られる。この見解は、語彙的女性化と完全二重語の使用を推奨する一方で、男性形の総称用法を認める立場をとっている。Cerquiglini(1989, 2018)では、名詞が総称指示(*générique*)の場合は男性形の総称用法を、特定指示(*spécifique*)の場合には完全二重語を使うことを奨励している。つまり、特定の男女から構成される対象を指示する場合(cf (7))には完全二重語を使用することが望ましいとする一方で、一般の対象に向けた場合(cf.(8))には、*tous les voyageurs et toutes les voyageuses* や *tous.es les voyageur.es* と両性併記することは逆に不適切であるとしている。この路線を踏襲しているのが、2017年11月21日付の通達であり、「男性形は中性形である」と明言している<sup>29</sup>。

(6) Dans cet hôpital, les fonctions de chirurgien (*générique*) sont occupées par une

---

<sup>28</sup> この上院の法案を「時代の空気に流されないように(*ne pas céder aux airs du temps*)」すると肯定的に評価したマクロン大統領のヴィレール＝コトレでの演説に対して、2023年11月2日付メディアパール紙は、フランス政府が反対しているのは、いまだそれほど浸透していない一部の包括書法そのものに対してではなく、フェミニズムをはじめとした急進的な思想を持ったグループであると論じている。

<https://www.mediapart.fr/journal/culture-et-idees/021123/interdiction-de-l-ecriture-inclusive-les-ressorts-d-un-proces-politique> (2023年11月3日閲覧)

<sup>29</sup> <https://www.legifrance.gouv.fr/download/pdf?id=wEtdPmGTGjdd7202jfyTkHEkAp4FIizANS-DxD8-Hjk> (2023年9月25日閲覧)

chirurgienne (spécifique). (Cerquiglini 1989 :39)

(7) Tous les candidats et toutes les candidates ont été reçus à l'examen. (Cerquiglini 2018 :75)

(8) Tous les voyageurs sont priés de descendre. (Cerquiglini 2018 :75)

Charaudeau (2018, 2021)も同様に、集合名詞では性が中立化(neutralisation)されるので二重語表記が不要であるが、逆に特定の男女両者から構成される対象を指示する場合には二重語使用が正当化されうるという立場をとっている<sup>30</sup>。

### 3.4. 統語的女性化の現状

2017年10月から2021年9月までのル・モンド紙で使用される包括書法を調査した Kamblé-Bagal & Tatossian (2022 : 8)によれば、同紙では完全二重語の使用は17%から7.2%に減少している。その一方で、省略二重語は、16.2%からわずかに14.9%に減少しているものの、むしろ安定して使用されている。ただし、省略二重語の大多数は、participant(e)sのようなカッコ使用であり、中黒やピリオドによる分かち書きではないとしている<sup>31</sup>。カッコを使用した分かち書きは、包括書法が問題になる以前からも公的文書で生年月日を記す欄で né(e) などと使用されていたために違和感が少ないのだろう。

統合的女性化は、上記のように、いまだ表記法に揺れがあり、かつ使用には多くの反論があるものの、好まれて使用される文脈も散見される。以下具体的に見てみよう。

#### 3.4.1. 呼びかけ

メールの宛先、メッセージの受信者に対して呼びかけるために、完全二重語がしばしば使用されている。とりわけ、商業分野や私信ではかなり浸透しているように見受けられる。

(9) Chère abonnée, cher abonné (*Le Monde* 紙からのメールのヘッダー)

(10) Chères clientes, chers clients (店に貼られていた表示)

(11) Chères et chers collègues (私信、メールの書き出し)

(12) Bonjour à toutes et tous (私信、メールの書き出し)

特定の対象に宛てた私信の場合には、受信者が男女混成であれば、完全二重語を使うことは理にかなっていると言えよう。他方、商業メールや店の表示など不

---

<sup>30</sup> Charaudeau (2018)では、省略後使用の場合には、中黒使用よりもカッコを使った(« Cher(e)s ami(e)s »)の方が「エレガントである」としてカッコ使用が推奨されている。

<sup>31</sup> Kamblé-Bagal & Tatossian (2022 :9).

特定多数の人々に宛てた呼びかけでは、Cerquiglini や Charaudeau の議論からすれば、男性形の総称用法で十分なはずである。にもかかわらず、女性形を併記するのは、女性客をないがしろにしていないと受信者にアピールするための発信者側の意思表示であると考えられる。同じような「冗長な」女性形の使用は、3.4.4.で見ると、政治家による口頭での国民への呼びかけにも見られる。

### 3.4.2. 求人広告

2019年2月13日(2023年5月30日改訂)フランス労働・雇用・社会復帰省が出した指針によれば、求人募集をかける場合には性別や家族構成を特定することを禁止するとされている<sup>32</sup>。このような政治的な動きもあり、求人広告では、統語的女性化が概ね使用されている。スペースの関係からか、省略二重語または(H/F)が使われていることが少なくない。

(13) Recherche coiffeur(se) (レンヌ、店のウィンドウに掲示)

(14) Passionné(e) par la mode et la vente ? Postes à pourvoir : responsable de boutique, conseillère / conseiller de vente (パリ、店のウィンドウに掲示)

(15) Professeur/ Professeure de piano (H/F) [...] Nous recherchons un professeur de Piano à 21220 Broindon. (Pôle emploi のサイトより<sup>33</sup>)

(16) Infirmier(e) (H/F) [...] L'infirmièr(e) réalise des soins infirmiers dans une démarche préventive, curative et/ou palliative. (Pôle emploi のサイトより<sup>34</sup>)

完全二重語または省略二重語が首尾一貫して使用されている場合もあれば、(15)のように求人広告のタイトルにのみ二重語が使用され、後続文では、男性形の総称用法に置き換わっている場合も少なくない。

### 3.4.3. 大学のサイト

Haddad (2023 : 283-287)は、2022年の時点で、パリ近郊にある11の大学のうちの7校が大学サイトの page d'accueil において統語的女性化を使っていること、統語的女性化は政治的に左の思想を持った大学で使用される傾向があること、学部レベルでは医学部よりは文学部の紹介で使用される傾向にあることを指摘している。実際、パリ第3大学の最初のページでは、(17)が示すように、最初の見出しに完全二重語が使われている。しかし同一テキスト中の後続文では男性形の総称用法に変わっている。それはパリ＝サクレ大学も同様であり、Lycéennes et lycéens :

<sup>32</sup> L'égalité professionnelle Femmes-Hommes

<https://travail-emploi.gouv.fr/droit-du-travail/egalite-professionnelle-discrimination-et-harcelement/article/l-egalite-professionnelle-femmes-hommes> (2023年9月25日閲覧)

<sup>33</sup> <https://candidat.pole-emploi.fr/offres/recherche/detail/161KBRS> (2023年9月25日閲覧)

<sup>34</sup> <https://candidat.pole-emploi.fr/offres/recherche/detail/161RCSW> (2023年9月25日閲覧)

entrer à l'université と始まったコラムの下に書かれた細分化項目では Étudiants internationaux と男性形の総称用法が使用されている。

(17) *Pour les étudiantes et étudiants extracommunautaires* : Pour l'année universitaire 2023-2024, les étudiants extra-communautaires pourront bénéficier de l'exonération partielle des droits d'inscription, conformément à la délibération favorable par le Conseil d'administration de Sorbonne Université le 4 juillet 2023.<sup>35</sup>

(18) Lycéennes et lycéens : entrer à l'université<sup>36</sup>

パリ＝サクレ大学は、2022年包括書法を書くためのガイドブック *Guide pratique Communication pour un langage égalitaire*<sup>37</sup>を独自に作成し、その中で完全二重語を使うことを強く奨励しているが、当該大学のサイトを見る限りにおいては男性形の総称用法の方が多く使用されている。

#### 3.4.4. 政治家の演説で使用される完全二重語

1958年6月27日、ド＝ゴール将軍が「*Françaises, Français, aidez-moi !*」とテレビで国民に呼びかけたことは有名だが、政治家の演説では、総称的な対象に対しても、完全二重語が使用されることがある。とりわけ、*homme/femme, ceux/celles, chacun/chacune*などの二重語が、大統領の演説ではしばしば使用されている(Haddad 2023 :294-304)。政治家の完全二重語の使用は、Haddad(2023 : 302)によれば1) 呼びかけ、挨拶、2)国内の経済および政治に関する話題、3)国際外交、国際政治、4)フランス国民の誇りに言及する場合に見られるとのことだが、とりわけシラク元大統領の時代から、大統領によって使用頻度にはばらつきはあるものの、かなり顕著になっているという<sup>38</sup>。

(19) Et je pense d'abord à toutes celles et tous ceux qui sont victimes de la solitude, de la maladie, de la détresse.<sup>39</sup>

(20) Notre plus grande fierté en effet ce sont les Françaises et les Français.<sup>40</sup>

<sup>35</sup> <https://www.sorbonne-universite.fr/offre-de-formation/candidater-et-sinscrire/modalites-dinscription-et-couts-des-etudes> (2023年9月25日閲覧)

<sup>36</sup> <https://www.universite-paris-saclay.fr/admission/lyceens-entrer-luniversite> (2023年9月25日閲覧)

<sup>37</sup> <https://www.universite-paris-saclay.fr/sites/default/files/2022-03/Guide-egalitaire.pdf> (2023年9月25日閲覧)

<sup>38</sup>シラク元大統領とマクロン大統領では、完全二重語の使用に大きな違いがあり、前者はなるべく多くの人々にメッセージを伝えようとする共感から使用するのに対して、後者は、完全二重語の使用がすでにシステマティックになっているということをHaddadは指摘している。

<sup>39</sup> 2006年のシラク元大統領による演説。Haddad (2023 :299)より引用。

<sup>40</sup> 2020年12月のマクロン大統領による演説。Haddad (2023 :300)より引用。

政治家の口頭演説で使用される二重語は、あくまで音で女性を顕在化することが目的とされている。マクロン大統領のフランス国民に向けた演説は常に « Françaises, Français, mes chers compatriotes » という呼びかけから始まるが、エリゼ宮のサイトに掲載されている演説原稿を見ると、最後の mes chers compatriotes のみが男性形の総称用法で書かれていることに気がつく。しかし、chers と chères の発音が同じことから、耳で聞くと、mes chers compatriotes は男女の区別のない通性表現として受け取られることになる<sup>41</sup>。

興味深いことに、2023年10月30日のマクロン大統領の演説では、3.3.2.で指摘した省略二重語使用の禁止法案に言及しているが、完全二重語 celles et ceux が数回使われている。これは、省略二重語と完全二重語が全く異なるものであるという政府の見解を如実に示していると言えよう。

(21) Ces figures essentielles, ce sont toutes celles et ceux qui transmettent et font vivre le français dans cette pulsation constante qui fait que le français, comme toute langue, se transmet par ses règles, son carcan diraient certains, mais la sédimentation de tout ce qui nous a précédés et se libère, se crée, se réinvente.<sup>42</sup>

政治家が演説で総称的な対象に対してあえて完全二重語を使うのは、3.4.1.で見た商業メールの宛先と同様に、女性を言語的に際立たせることによって女性へのアピールを行なうことが目的であると推察される。

### 3.5. 不安定な使用

統語的可視化の使用は現在のところかなり不安定である。実際、完全二重語または省略二重語から始まったテキストが、途中から男性形の総称用法に替わることは少なくない。リベラシオン紙に掲載されていた記事(22)においても、省略二重語および完全二重語が使用された後に、男性形の総称用法 décideurs が使われている。

(22) Mais sur le modèle de l'égalité entre femmes et hommes, nous sommes surtout convaincu·e·s que ces instruments devront s'articuler à une autre obligation : celle de mesurer les discriminations raciales au niveau des institutions et des

---

<sup>41</sup> 大統領の演説内では、男性形の総称用法が使用されることは少なくない。

Plus généralement, c'est une colère qui s'est exprimé, une colère, face à un travail qui, pour trop de Français, ne permet plus de bien vivre, face à des prix qui montent, du plein, des courses, de la cantine.

<https://www.elysee.fr/emmanuel-macron/2023/04/17/adresse-aux-francais-2> (2023年9月25日閲覧)

<sup>42</sup> 2023年10月30日のマクロン大統領演説より引用。<https://www.elysee.fr/front/pdf/elysee-module-21835-fr.pdf> (2023年11月1日閲覧)

entreprises, à la fois pour permettre aux acteurs et actrices en charge de les identifier, pour responsabiliser les décideurs dans leurs politiques et leurs résultats en matière d'égalité [...] <sup>43</sup>

Le Draoule & Péry-Woodley(2021)は、統語的女性化の実践に関して首尾一貫性を欠いたテキストが非常に多いことを指摘している。実際、形容詞の一致を含め、統語的女性化を使ってテキスト全文を書こうとすると、かなり重たい読みにくいテキストになる。このような障害を避けるために、一部の名詞や形容詞にのみ省略二重語を使用し、残りは男性形の総称用法を使うという選択がなされている可能性がある。他方、統語的女性化を実践しようとするあまり、通性名詞 *personne* に対してまで二重語併記が施されている誤用もある。*personne* の文法性は女性なので、形容詞が男性形に一致することはあり得ないものの、(23)ではそれが行われている。このような誤用の例を見ても、統語的女性化の実践が人々に与える負担が小さくないことが窺える。

(23) Cette aventure inédite, faut-il le rappeler, ne l'est d'ailleurs pas pour bon nombre de détenu·es, de personnes malades, handicapé·es, agé·es, [...] <sup>44</sup>

## 4. 中立化

### 4.1. 性の不可視化とノンバイナリー

中立化には、大きく分けて2つある。男女二元論を肯定する立場を取りながらも性をあえて不可視化する名詞を使う書法と、男女二元論自体を否定する立場から、男女二元論に当てはまらないジェンダーアイデンティティを標榜する対象を指示するノンバイナリーな表現を使う書法である。

前者には、通性語(*mot épïcène*)の使用がある。通性語とは、限定詞の使い分けのみで男性名詞にも女性名詞にもなりうる通性名詞(*le / la responsable*)、総称的な価値を持つ名詞(*l'individu* や *la personne*)、および男女同形の形容詞 (*apte*)などを指す。また、人を指示しない名詞での言い換え(*le juge* → *le tribunal*, *à satisfaction de tous* → *à satisfaction Générale*)もこれに相当する (Elmiger 2008, HEC 2022)。

後者には、新たな中性代名詞(*pronom neutre*)の使用がある。具体的には、*il* および *elle* に代わる *iel* または *ille*、*ils* および *elles* に代わる *iels* または *illes*、*ceux* および *celles* に代わる *celleux* または *ceulles* である。さらに、省略二重語もノンバイナリーな表現となりうる。省略二重語は、3.で見たように、統語的女性化の書法でもあるが、完全二重語が専ら男女双方の対象を明示して女性を可視化するのに対して、省略二重語は女性の可視化のみならず、ノンバイナリーな対象を

<sup>43</sup> [https://www.liberation.fr/debats/2020/06/17/lutte-contre-les-discriminations-raciales-mesurer-pour-avancer\\_1791518/](https://www.liberation.fr/debats/2020/06/17/lutte-contre-les-discriminations-raciales-mesurer-pour-avancer_1791518/) (2023年9月25日閲覧)

<sup>44</sup> リベラシオン紙 (日付不明) からの引用とのこと。Le Draoule & Péry-Woodley(2021)より引用。

指示する中立的な表現にもなるという点で完全二重語とは大きく異なる。たとえば、Je suis étudiant·e は、自らをノンバイナリーな対象であると明示している表現であり、女性の可視化ではない<sup>45</sup>。また省略二重語の表記としては、x を使用するケース(les étudiant·xes )もある HCE(2022 :22)。

## 4.2. iel/iels

ここでは、中性代名詞 iel と iels を細かく見てみたい。iel と iels は、2021 年、オンライン辞書 *Le Robert DICO EN LIGNE* に収録された新語である。*Le Robert DICO EN LIGNE* では、以下のように定義されている、

Iel, iels pronom personnel

rare Pronom personnel sujet de la troisième personne du singulier (*iel*) et du pluriel (*iels*), employé pour évoquer une personne quel que soit son genre. *Iel se définit comme non binaire. Les stagiaires ont reçu les documents qu'iels doivent signer.*<sup>46</sup>

iel と iels が掲載された当時、各方面から非難されたことはいまだ記憶に新しい。*Dictionnaire Larousse* の新語導入に毎年携わっている Cerquiglini は、掲載直後スイスのラジオ局のインタビューで「iel と iels は一般には使われず、活動家または実験的な文学作品でしか使用されていない。したがって、わずか 80000 語しか採録しない一般の辞書に入れるべきではない。また、代名詞は言語システムの一部であり、職業名を女性化するのとは全く話が異なる。iel は主語人称代名詞だが、それに対応する目的語の代名詞は考案されていない。iel を採録するならば、それに対応する形容詞や過去分詞の中性形も必要になる。ラテン語の中性が歴史の中で消滅し、他のロマンス語と同様にフランス語は現在中性を持たない言語だが、このように長い時間をかけて形成された言語システムを単なる急進的な活動家の動きのみで変えることはできない。<sup>47</sup>」と反論を述べた。同様に、Charaudeau はル・モンド紙に論考を寄せ、これまで辞書の歴史において文法に合致しない機能語が掲載されたのは初めてであると述べ、なぜ ille や ceux は割愛され、この 2 語だけで収録されたかも不可解であると指摘した<sup>48</sup>。また、それと同時に、すでに男性形が生物性の中立化を行うフランス語の現状を無視した書法そのものに問題があるとも言っている。Haddad (2023 :165-166)は、ノンバイナリーな新語に対して

<sup>45</sup> Les linguistes atterrées (2023:51).

<sup>46</sup> <https://dictionnaire.lerobert.com/definition/iel> (2023 年 9 月 25 日閲覧)

<sup>47</sup> <https://www.rts.ch/info/monde/12660165-le-pronom-iel-na-pas-sa-place-dans-le-dictionnaire-estime-un-linguiste.html> (2023 年 9 月 25 日閲覧)

<sup>48</sup> [https://www.lemonde.fr/idees/article/2021/12/15/on-n-a-jamais-vu-dans-l-histoire-des-dictionnaires-l-intrusion-de-mots-qui-ne-soient-conformes-a-la-grammaire\\_6106089\\_3232.html](https://www.lemonde.fr/idees/article/2021/12/15/on-n-a-jamais-vu-dans-l-histoire-des-dictionnaires-l-intrusion-de-mots-qui-ne-soient-conformes-a-la-grammaire_6106089_3232.html) (2023 年 9 月 25 日閲覧)

2021年の時点で79%のフランス人が反対していることを指摘している<sup>49</sup>。また3.3.2.で触れたように、2023年10月30日、公的文書、商業文書、販売広告、取扱説明書などで新しいノンバイナリー代名詞の使用を禁止する法案が上院で可決された。上院では、これらの新たな代名詞が単なる新語法ではなく、「政治的かつイデオロギー的なマーカー」であり、ある種の思想と必然的結びつくために公での使用にはそぐわないとされた<sup>50</sup>。換言すれば、これらの代名詞は思想的に中立な中性代名詞ではないと判断とされたことになる。

実際 iel などノンバイナリーな代名詞の使用は極めて限定的であり、使用テキストには思想的にかなり偏りが見られるようである。*Le Robert DICO EN LIGNE* で引用されている iel を含むテキストを見ると、フェミニズムや LGBT などに関する論考であり、iel の使用が、書かれているテキストの内容や思想と無関係ではないことが窺える。私信または急進的な推進派が使用する場合を除いては、ノンバイナリーな代名詞の使用が非常に少ないことも指摘されている(Haddad 2023 :165)。

(24) Il s'agit avec ce corpus de mettre au jour les présupposés qui sous-tendent la réflexivité politico-langagière mise en place par les militant·es anarchistes/autonomes vis-à-vis de leur pratique langagière lorsqu'iels s'organisent collectivement.<sup>51</sup>

(25) Pour chuchoter aux enfants qu'iels sont capables, fort·es dans leur corps, qu'iels peuvent dire non.<sup>52</sup>

#### 4.3. ノンバイナリーな代名詞と男性形の総称用法

ノンバイナリーな代名詞を実験的に使った小説がある。Rozenfeld が書いた SF 小説 *La symphonie des abysses*<sup>53</sup> では、子供のうちはまだ性別を持たない中性(le Neutre)である世界が設定され、子供たちを指す主語人称代名詞として常に iel と iels が使用されている。また、この小説の中では、直接目的補語の中性代名詞として lea、中性を指す強勢形人称代名詞として luiel および luiel-même もシステムテ

<sup>49</sup> 略語表記での中黒の使用に対する反対意見が61%であるのに比べると、iel と iels に対する反対意見はかなり高い数字であるとしている(Haddad 2023 :168)。

<sup>50</sup> [https://www.publicsenat.fr/actualites/parlementaire/le-senat-adopte-en-commission-une-proposition-de-loi-pour-interdire-lecriture-inclusive?utm\\_medium=Social&utm\\_source=Twitter#Echobox=1698233661](https://www.publicsenat.fr/actualites/parlementaire/le-senat-adopte-en-commission-une-proposition-de-loi-pour-interdire-lecriture-inclusive?utm_medium=Social&utm_source=Twitter#Echobox=1698233661) (2023年10月25日閲覧)

<sup>51</sup> [https://www.cairn.info/article.php?ID\\_ARTICLE=LS\\_172\\_0071#:~:text=Un·e%20locuteur·ice%20C%20lorsqu%27iel%20parle%20ou%20écoute%2C%20se%20fait%20une%20certaine%20idée%20de%20la%20situation%20dans%20laquelle%20iel%20se%20trouve%20ainsi%20que%20de%20sa%20relation%20d%27interlocution.](https://www.cairn.info/article.php?ID_ARTICLE=LS_172_0071#:~:text=Un·e%20locuteur·ice%20C%20lorsqu%27iel%20parle%20ou%20écoute%2C%20se%20fait%20une%20certaine%20idée%20de%20la%20situation%20dans%20laquelle%20iel%20se%20trouve%20ainsi%20que%20de%20sa%20relation%20d%27interlocution.) (2023年9月25日閲覧)

<sup>52</sup> [https://www.cairn.info/article.php?ID\\_ARTICLE=RZ\\_014\\_0064#:~:text=Pour%20accueillir%20n%27importe%20qui%2C%20quelle%20que%20soit%20son%20identité%2C%20quelle%20que%20soit%20la%20norme%20générée%20qu%27iel%20a%20piétinée.](https://www.cairn.info/article.php?ID_ARTICLE=RZ_014_0064#:~:text=Pour%20accueillir%20n%27importe%20qui%2C%20quelle%20que%20soit%20son%20identité%2C%20quelle%20que%20soit%20la%20norme%20générée%20qu%27iel%20a%20piétinée.) (2023年9月25日閲覧)

<sup>53</sup> Rozenfeld, Carona, *La symphonie des abysses* tome 1, 2014, Robert Lafont.

ニックに使用されている。

(26) Tout était clair pour Sa, et iel était prêt à annoncer son choix.<sup>54</sup>

(27) Et luiel-même, une fois qu’iel aurait appris quel serait le destin de son ami, comment le vivrait-iel ?

(28) Que pensait son ami en lea découvrant homme, tout comme luiel ?

(29) Les épaules collées, iels étaient tous les deux nus à l’exception d’un pagne qui ceignait leurs hanches étroites.

特筆すべき点は、ノンバイナリーな代名詞を使ったこの小説では、統語的女性化の使用が全く見られず、男性と女性の対象が混在した場合には、名詞、形容詞、過去分詞に対して全て男性複数形が使用されているということ、また新たな中性代名詞にかかる形容詞や過去分詞がすべて男性形をとっているということである。たとえば、(26)では *iel était prêt.e* ではなく *iel était prêt*、(29)では *iels étaient tou·tes les deux nu·es* ではなく *iels étaient tous les deux nus* となっていたことに注目しよう。性別を持たない中性の登場人物を言語的に際立たせるために、*iel* など新たな中性代名詞が駆使されているのに対して、中性指示を行う省略二重語が使用されていないのはいささか不可解でもある。しかし、これは逆にいうと、作家にとって男性形が中性であるという認識が依然としてあったということを図らずも露わにしていなかったらうか。つまり、代名詞以外では慣習に則った男性形の総称用法をよしとする作家の姿勢がここに見え隠れするということである。ここで、われわれは男性形の総称用法を使った *Rozenfeld* を非難しているわけではない。むしろ主張したいのは、名詞の性がどちらとも決められない場合には男性形がデフォルトの形態であると考える言語直感がフランス語話者にはあるということである。すでに 3.4.3.および 3.5.で見たように、統語的女性化を実践しつつも、テキストの途中から男性形の総称用法が使用される例は枚挙にいとまない。むしろ完全二重語または省略二重語を使用してテキストをすべて書く方が非常に困難なように見受けられた。また、*Cerauiglini* や *Charaudeau* が主張するように、指示対象が不特定である場合には、男性形の総称用法が理にかなっているという議論もあった。これらの事実から鑑みるに、対象の性が男女どちらと同定できない場合には、両性を可視化した表記法やノンバイナリーな表記を選択するのではなく、男性形の総称用法が優先されるという感覚がフランス語話者には根強くあると推察できそうである。換言すれば、男性形の総称用法は、一部の包括書法支持者たちから非難の的になってはいるが、排除するのがかなり困難な言語直感ではないかということである。

---

<sup>54</sup> (26)～(29)の例は全て、*La symphonie des abysses* tome 1 より引用。

## 5. おわりに

フランスの包括書法は、語彙レベルの女性化から、文章レベルでの女性可視化、および中立化へと議論の内容が変化しつつある。語彙形成にのみかかわる語彙的  
女性化は、いくつかの議論がいまだにあるものの、公にほぼ認定され、一般に運  
用されるようになった。他方、統語的女性化に関しては、男性形と女性形を併記  
する完全二重語が一部の分野で使用されているものの、表記法にはかなりの揺れ  
が見られ、運用も不安定である。また分かち書きをする省略二重語は、表記のみ  
ならず読解をする上での問題もある。ピリオドや中黒使用には、政府からも否定的  
な意見が出されると同時に、人々からも難色が示されている。中立化に関して  
は、ノンバイナリーな中性代名詞が新規に登場し、一部の辞書に掲載されたもの  
の、一般には運用されず、また公的権力がその普及に大きく歯止めをかけつつあ  
る。統語的女性化や新たな中性代名詞は、主として、文章表記法および文法体系  
に重大な影響を与える可能性があるという理由で拒絶されている。しかし、それ  
に加えて、男性形の総称用法が言語直感としてフランス語話者には根強くあり、  
それが拒否反応の大きな要因となっているように推察される。語彙的女性化は、  
これまで欠落していた女性形を新たに作ったので比較的受容されやすかったのに  
対して、統語的女性化と中立化は、これまで男性形の総称用法で充足していたと  
ころに新たな形式を持ちこもうとしているので強い拒絶反応があると考えられる。  
冒頭で挙げた「欧州議会における男女平等の統合的取り組み」が定める「性の観  
点から平等かつ包括的な言語の使用」を達成するために、フランスは今後どのよ  
うな言語政策をトップダウンで行うのか、また、ジェンダーにとらわれない平等  
な社会を目指すボトムアップの動きがノンバイナリーな包括書法を広めていくの  
か、今後の動向を見守りたい。

### 参考文献

Académie Française (2019) *La féminisation des noms de métiers et de fonctions.*

[https://www.academie-francaise.fr/sites/academie-francaise.fr/files/rapport\\_feminisation\\_noms\\_de\\_metier\\_et\\_de\\_fonction.pdf](https://www.academie-francaise.fr/sites/academie-francaise.fr/files/rapport_feminisation_noms_de_metier_et_de_fonction.pdf)

(2023年9月25日閲覧)

Charaudeau, Patrick (2018) « L'écriture inclusive au défi de la neutralisation en français », *Le Débat*, no199, 13-31.

Charaudeau, Patrick (2021) *La langue n'est pas sexiste. D'une intelligence du discours de féminisation*, Lormont, Le bord de l'eau.

Cerquiglini, Bernard (2018) *Le Ministre est enceinte. ou la grande querelle de la féminisation des noms*, Paris, Seuil.

Elmiger, Daniel (2008) *La féminisation de la langue en français et en allemande. Querelle entre spécialistes et réception par le grand public*, Paris, Honoré Champion.

*Femme, j'écris ton nom... Guide d'aide à la féminisation des noms de métiers, titres, grades et*

- fonctions* (1999) par Becquer, Annie, Bernard Cerquiglini, Nicole Cholewka, Martine Coutier, Josette Frécher et Marie-Thérèse Mathieu, sous la direction de Bernard Cerquiglini, Paris, La Documentation française.
- Gygax, Pascal, Gabriel, U. & Zufferey, S. (2019). Le masculin et ses multiples sens : Un problème pour notre cerveau... et notre société. *Savoirs en Prisme*, 10, e-publication.  
[https://www.researchgate.net/publication/337988915\\_Le\\_masculin\\_et\\_ses\\_multiples\\_sens\\_Un\\_probleme\\_pour\\_notre\\_cerveau\\_et\\_notre\\_societe](https://www.researchgate.net/publication/337988915_Le_masculin_et_ses_multiples_sens_Un_probleme_pour_notre_cerveau_et_notre_societe) (2023年9月25日閲覧)
- Haddad, Rapaël (2019) *Manuel d'écriture inclusive*, Troisième édition, Mots-Clé.  
<https://stimulusconference.ca/wp-content/uploads/2021/07/Gender-inclusive-language-in-French-a-manual.pdf> (2023年9月25日閲覧)
- Haddad, Rapaël (2023) *L'écriture inclusive, et si on s'y mettait ?*, Paris, Le Robert.
- Haut Conseil à l'égalité entre les femmes et les hommes (2016) *Pour une communication publique sans stéréotype de sexe. Guide pratique*, La documentation française.  
[https://www.haut-conseil-egalite.gouv.fr/IMG/pdf/guide\\_pour\\_une\\_communication\\_publicque\\_sans\\_stereotype\\_de\\_sexe\\_vf\\_2016\\_11\\_02.compressed.pdf](https://www.haut-conseil-egalite.gouv.fr/IMG/pdf/guide_pour_une_communication_publicque_sans_stereotype_de_sexe_vf_2016_11_02.compressed.pdf) (2023年9月25日閲覧)
- Haut Conseil à l'égalité entre les femmes et les hommes (2022) *Pour une communication publique sans stéréotype de sexe. Guide pratique, version actualisée 2022*, La documentation française. [https://www.haut-conseil-egalite.gouv.fr/IMG/pdf/guide\\_egacom\\_sans\\_stereotypes-2022-versionpublique-min-2.pdf](https://www.haut-conseil-egalite.gouv.fr/IMG/pdf/guide_egacom_sans_stereotypes-2022-versionpublique-min-2.pdf) (2023年9月25日閲覧)
- Kamlé-Bagal, Nikita & Anaïs Tatossian (2022) « Étude comparative sur l'usage de l'écriture inclusive dans deux médias écrits français et québécois » *SHS Web of Conferences* 138, 2003, 8<sup>e</sup> Congrès Mondial de Linguistique Française. <https://doi.org/10.1051/shsconf/202213812003> (2023年9月25日閲覧)
- Klinkenberg, Jean-Marie (2021) « L'incitation douce dans la mise en œuvre des politiques linguistiques. Le cas des usages non sexistes », *Actes Sémiotiques* [En ligne]. 2021, n° 124, 1-14. <https://doi.org/10.25965/as.6692> (2023年9月25日閲覧)
- Le Draoulec, Anne & Marie-Paule Péry-Woodley (2021) « Pataquès et joyeux bordel », *Bling* (Blog de linguistique illustré). <https://bling.hypotheses.org/6299> (2023年9月25日閲覧)
- Les linguistes atterrées (2023) *Le français va très bien, merci*, Paris, Tracts Gallimard.
- Moreau, Marie-Louise (2019) « Proximité dans l'écriture inclusive. Peut-on utiliser n'importe quel argument ? », in Anne Dister et Sophie Piron *Les discours de référence sur la langue française*, pp.351-378. <https://books.openedition.org/pusl/26517> (2023年9月25日閲覧)
- 中尾和美(2022)「フランス語における女性の可視化および中立化と語学教育」『慶應義塾 外国語教育研究』第18号, 慶應義塾大学外国語教育センター, 1-18.
- 立花史 (2022) 【翻訳】パスカル・ジジャックス、ウーテ・ガブリエル、サンドリーヌ・ジユフ「男性形とその複数の意味：私たちの脳と私たちの社会によっての問題」『慶應義塾大学日吉紀要フランス語フランス文学』74号, 慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会 27-52.
- Tibblin, Julia, Jonas Granfeldt, Joost van de Weijer et Pascal Gygax, (2022) « The male bias can be

attenuated in reading: on the resolution of anaphoric expressions following gender-fair forms in French», *Glossa Psycholinguistics* 2 (1): 13 1-33. DOI: <https://doi.org/10.5070/G60111267>  
(2023 年 9 月 25 日 閱覽)

Viennot, Eliane (2018) *Le Langage inclusif : pourquoi, comment*, Donnemarie-Dontilly, Éditions iXe.